

## 特別講演

# 「6～7世紀における土構造物の特性 — 飛鳥地域の後・終末期古墳の様相 —」

日時：2022年10月13日(木) 13:10-14:10

参加方法：オンライン (YouTube配信を予定、聴講のみ)

参加費：無料 (非会員も聴講できます)

聴講申し込み〆切：10月7日 (金)

聴講申し込みは  
こちらから



<https://forms.gle/mE7VMuwkRuWJWMjb8>

アクセスできない場合は学会事務局までお問合せください



講師 西光慎治氏

明日香村教育委員会文化財課課長補佐  
関西大学非常勤講師

### 要旨

3世紀半ばから7世紀末までの約400年間、日本列島各地に数万基に及ぶ古墳が造営された。大山陵古墳に象徴される前方後円墳をはじめ、中国皇帝陵の影響をうけた方墳、さらに飛鳥時代に天皇陵として創出された八角墳など大小さまざまな古墳(土構造物)が存在し、これらを造営する土木技術は古墳時代から飛鳥時代にかけて最盛期を迎える。時を同じくして寺院建築などに用いられていた版築工法が古墳の盛土に導入され、これまで王権の象徴とされた大規模な前方後円墳は姿を消し、薄葬化の流れとともに高塚墓は小型化の一途をたどる。さらに火葬の導入による造墓理念の変化は政治的シンボルとしての高塚墓の造営意義を失わせ、長く続いた日本の古墳文化は終焉を迎えることとなる。

本稿では6～7世紀にかけて政治・経済の中心地であった飛鳥地域の後・終末期古墳を取り上げる。飛鳥地域には当時、最先端の土木技術を屈指した皇族や有力豪族を埋葬された古墳が数多く存在している。蘇我稲目の墓とされる都塚古墳(多段築の方墳)をはじめ、齊明天皇の陵とされる牽牛子塚古墳(八角墳)や今年、極彩色壁画が発見されてちょうど50周年を迎えた高松塚古墳(円墳)など様々な構造を有していることから、構築過程の復元や盛土工法等の分析を通じて土構造物の特性について整理を行っていく。さらに、飛鳥地域の考古遺跡であり確認されてこなかった地割れや地滑り痕が確認されるなど被災した考古遺跡と自然災害の影響についても検証を行い、土構造物としての視点から飛鳥地域の後・終末期古墳の様相について総合的に検討を行ってきたい。



日本応用地質学会

### 問い合わせ先

一般社団法人 日本応用地質学会 事務局

〒101-0062 東京都千代田区神田駿河台2-3-14 お茶の水桜井ビル7F

Tel: 03-3259-8232, Mail: office@jseg.or.jp